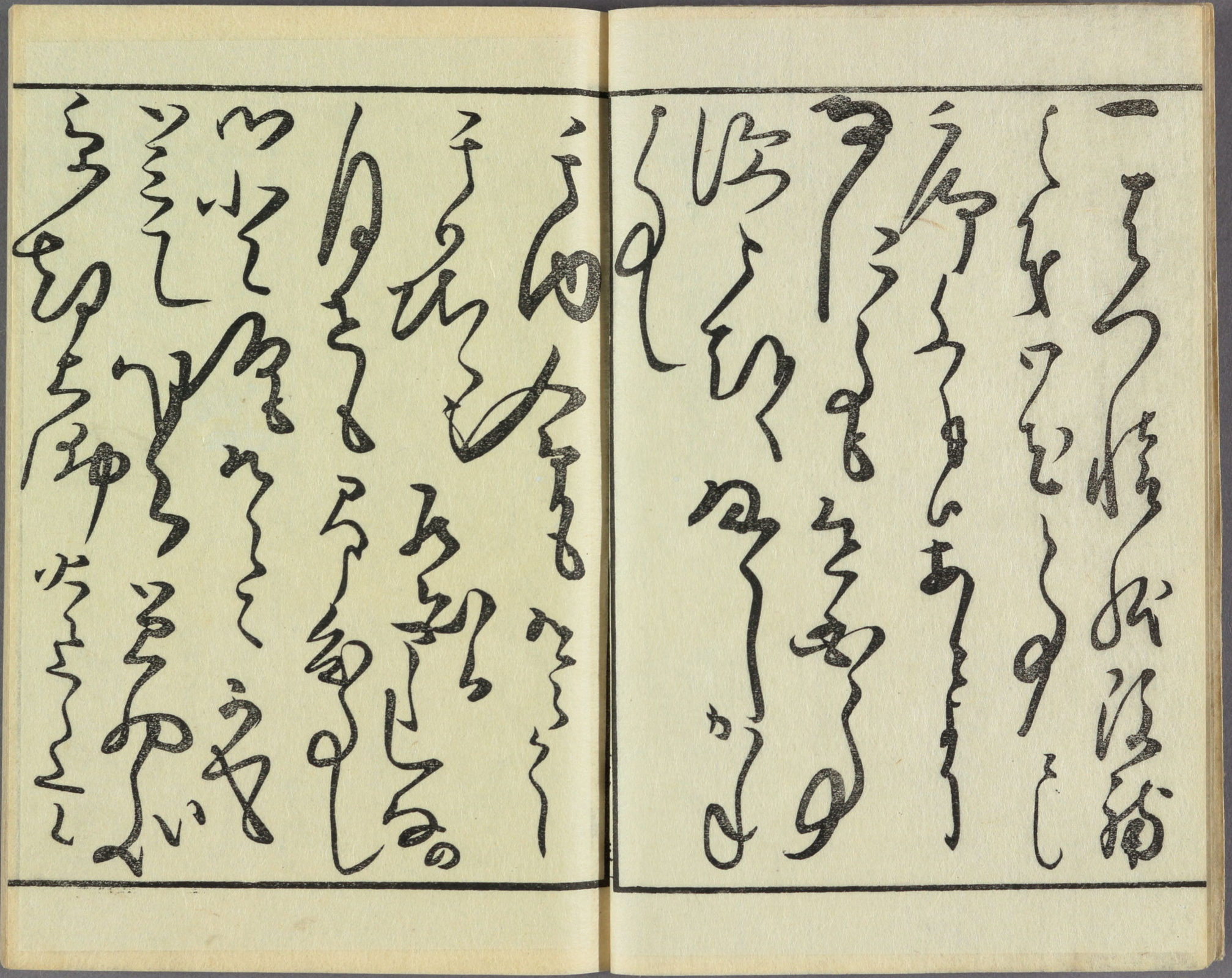
七部大鏡

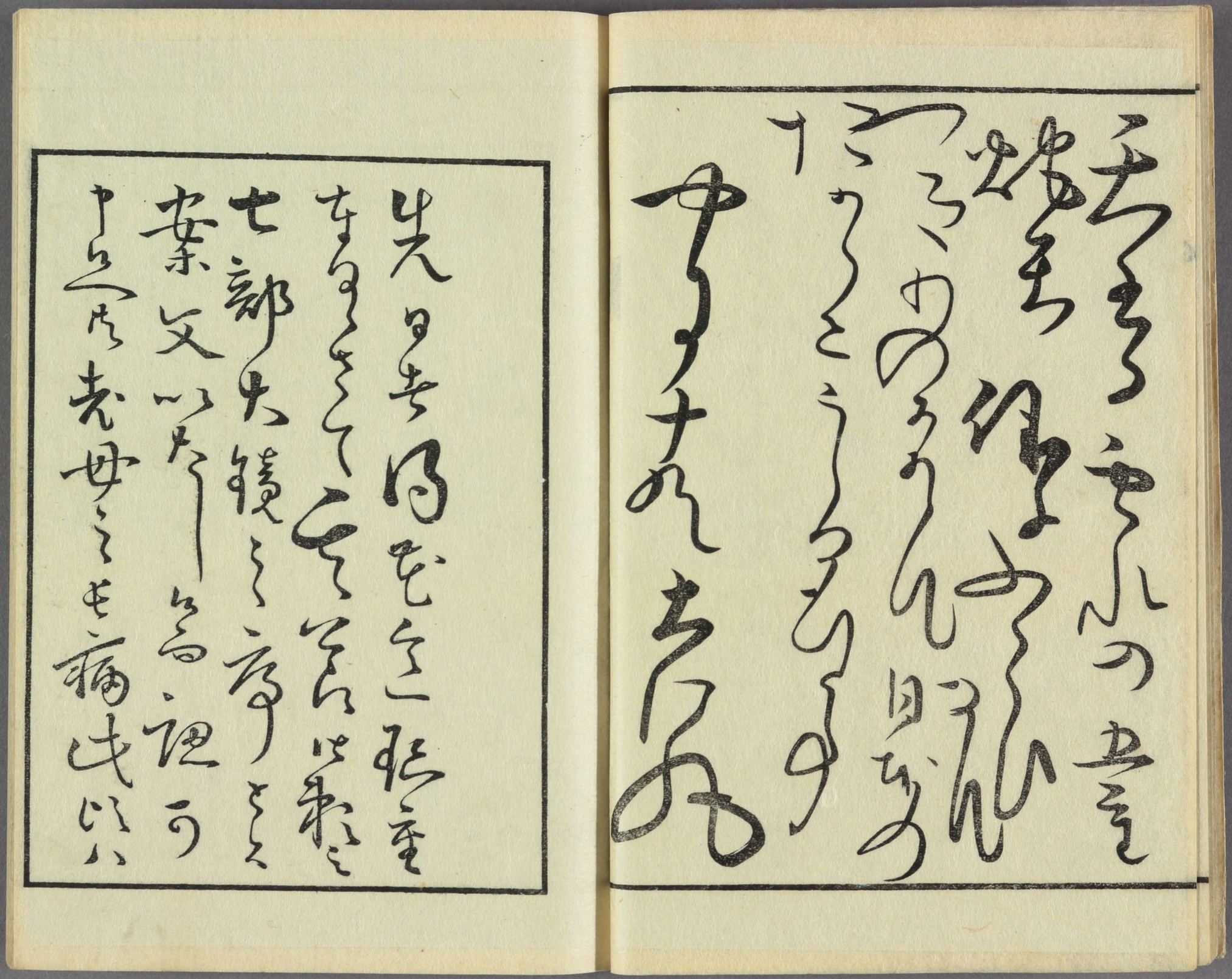
序

七部集大鑑序

芭蕉翁七部集。其言脫塵凡。其句亡高尚。後人為之注釋者。凡四十七家。彼此出入。精麁相半。未得其髓矣。翁居則一瓢之米自淅之。出則一挑之袱親搭之。嘯月嘲風。每所住着。所謂幽人之貞者歟。宜矣淺近凡俗之士。不能究其意也。科野何丸。學翁之正風者也。覃思研精。七年於茲。博

搜故事。遍檢古書。為之集
解。名曰七部大鑑。其意蓋
在於懸明鏡以照四十七
家之妍媸云。文化六年己巳
秋九月。書于科野吉田行次
江戸　鵬齋老人識





序下

十月さこゝ日　宣朱

何丸撰

二日ゝ宣稿い朱莫のこゝ
和選ゆい

きまゝきれゝ和つゝ命のまゝこゝる鶯鴉
のもゝる命かきゝ貝ゝ分すゝの栗
能乃二首撰きとの得ゝきハ法と
——きるゝこゝ仏ゝまりは丸き人ゝ
ゝきゝゝゝゝ号を一つゝきゝて七部
集の解ゝゝゝこゝ毋をかゝゝ宇

たゞし大槻とゝ
あるらすにきゝ
此集の序文を
のみまゝれ
つゝ
かたゝ

序 七

ゆゝ
しらるゝ
添書
かゝ
入花
もゝ

おき雁とも いつかはるーや

文政ひとゝせ秋日　雪中庵蓼山

人麻呂をうしなひ給ふ

拾遺集のあはれ多しとの

ものをとゝ詠ずるひい卯月を淋しん友

の月枕元書を字ほうふたとひみ飛ぶ

人々問ふ　ばかえり形ゝ　ゝ歌こう

ひとの風の声を聞てとゝ聞いく歌

あるくまゝふりてとまるあるくこの
さしまるとゝ人あるとゝ先声の風あるを
とゝ世のふ新あるまゝありてきまゝまゝ学
あるらなりとゝ古書は注解
をおもむかとそのくゝ人の心くゝ形のく
かるるあるくまゝ世にたゝいの七書
といふもちゝ芭蕉のかくゝ始めおけるも

ゝ人ゝ始ゝ後のくゝ人ゝ始ゝ諸集の
中をぬきぬ出ぬ女ゝ人ゝそのゝ世此ゝ後
まるふものゝ新ゝ呂ゝ準的とあるゝり
なりゝ紀ぬきゝ世ゝ物ゝ集中の雑
俳ゝをゝ世ゝ物ゝ説ゝ
をくゝ人ゝ七ゝ式の風雅ゝ一つのをひゝ
名ゝのあゝ紀ゝ人ゝ生ゝ量ゝ形ゝ

せんや五殿あるを形と門生に告げ
おう祈りといふの理といふを始下也
よのつねあるべし世と百年の後よ
ありといえども宗旨殿みもよう御ってを
まるのみちをむまる信野の何也
御なる是ゝ注侍をうて七部大続と
ふこ祈りと一家の言うて所をうる

無とも凡風の事をを生まくにきて者ら夫
をひあてすべて道理御切るの世乱お
ひとり出ずるの八御の栄重ゝ所むの
但七書の中続出るみ此をきふき者
文川侯寄の法句を生ふ口元まき宗説
御寄門ゝを出の者ゝ江戸をて
きまして是ゝ一言ゝもくるわ也

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

隨齋寒灯のもとに筆を採

[illegible]

あるハ歌もの[illegible]
[illegible]
[illegible]
何[illegible]
秘[illegible]
[illegible]
俗語の[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

無般之工夫中此是
一段之工夫作之之要
の貝殼をもて作之俗語
の殼を去るを殼と称する
也

此部集ふ
注釋を加へ
鏡と名付る
を見よ

信濃の

何ぞやなれをうるに
れのゝたしめおそる
しゝきを本了れは
辞ことうせそこひ

言ひうるはうちの
你切知てとゝあく
うのもをを
ちくるに知色

文化年年八月

年樹樓主人謂

八草集而書

柿の実の天然小

二茶をとり出しうる

ひとりの本来様

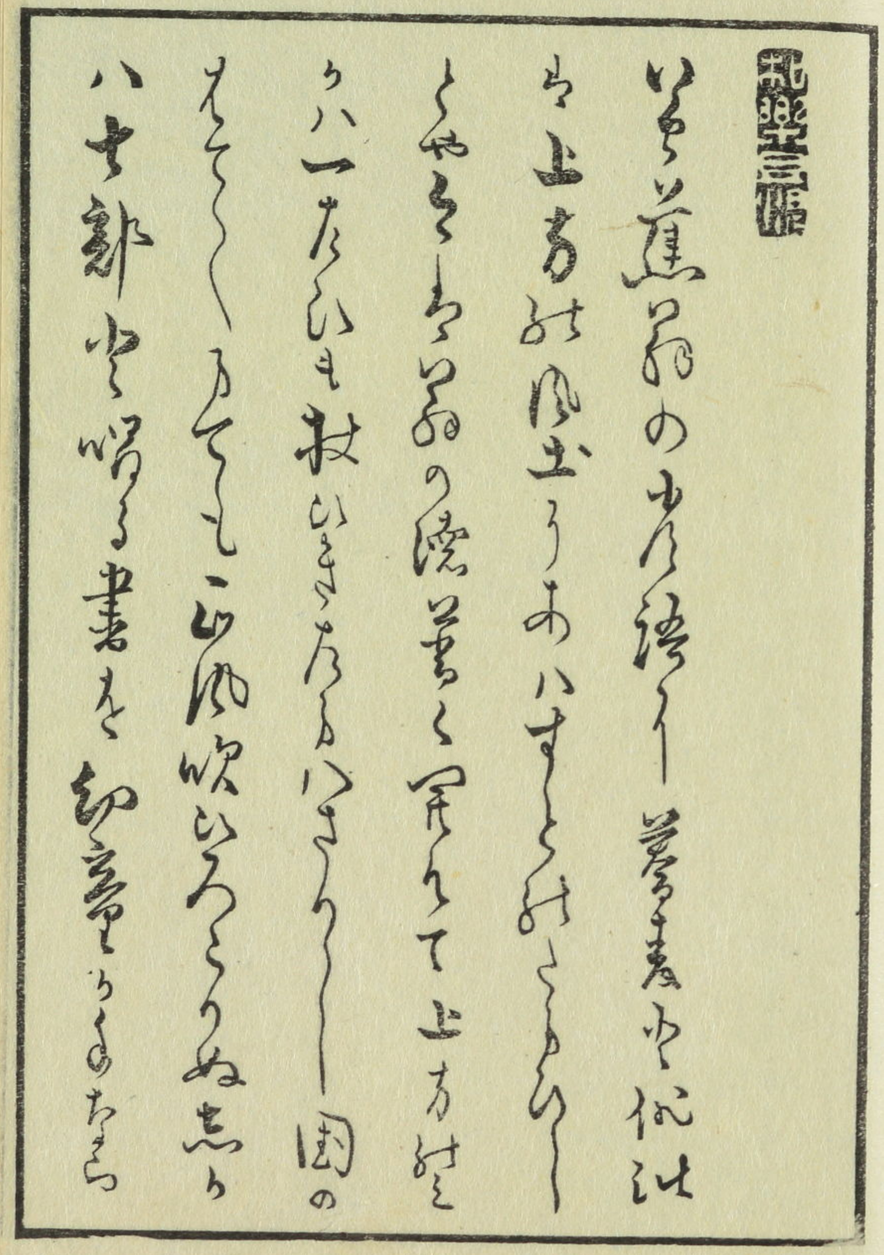
隣のむすめ

ゆりて
みといよ
ありしうあて
郭嘉駿うをもて
よくるものやうに
久とあるくやふれ
けるこゝを世に柿
八年とゝ本法松を
復て加ふるあるに

大樹

文政二年

い集 蕉雨



ちゝはゝ人まくさの道を清て時
ゝひをゝ式たゝへてゝらふ

北華一大墨書

古人曰ゝ霞
ゝ秋たゝ原ゝ
有陶淵明を家し
社かゝみ
ゝ事ゝ武ゝ移ゝぬを

器の小大てしるしる
てやはへ研磨のたら
ちかやちかのは
国土何九地の全心
伐見ちと好しこと

鍛錬する事を
大鏡と好しこと伐
てはなの秋毫も分
はいしちと
好ふてしなちと事

文化丁丑冬

序

月居

乃風流おのもしろ杜撰
乃ふるひを京おかしの国人
何れとしらの書部の言を
はしらとはしらるあしを袖
又ふみを紙しのふるを
流しをしらるあ林れしの
古風所見紀を編し其編を
世しらず偶しまて

[illegible]

天[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

東京

杜雷堂いつわ一書生なれどいとひとすぢ
文字書のみちにふかくこころざしぬ
是てを物のまなびに一ときもこれ
よく仔細に人をこころ松庵の
なるべし櫛をもしらべくるわらち識て
ものかきまくらに八幡紙を
よりて雪心をまとめ一日わすれ

のこすくさ〳〵六帖の下に物情のさしかは理を
つくれるものハ友人何麿歟ちかふるや近き
月日をつむるその日の下まりくのふるさとに
寄て詠を攀考きりし七瀬大鏡なりよ
ものされしいつにも後のとつきなに学びして
あゆるきのくさつし入るの思ひたるくさ
雲に木猶てあきれ小よきる別るき雲の
ふる遊されとも中よくみるまゝ摘て年をうる

方年りまくさるにおもひつる題名なりかさしく六
こゝに思ひよくなしてまき彼方此方の物つくる
ときく古年筆に心をこめしきしりゆへん
守ゆるもやまうさくるぬ此編書のすゝめなきハ
梓に剞劂て傳世に志らんにおいくらハ是へつ
学びん子書肆の紙屋なつてかしすゝもの
さるそのやらんと

文政乙酉春

八朶園寶船書

土井家蔵書之印

四規〻ゝ法鏡さゝめてゝ〻ゝ
てゝもゝゝおのもうれりつゝなゝ〻〻
なゝしゝゝゝゝ神ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
千里のゝゝるまゝゝ見えゝゝゝゝゝゝ法
〻〻〻〻ゝいゝゝゝかゝゝゝゝゝゝゝゝ法の
ゝゝゝゝゝの中ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かゝる以心伝こゝの葉は
いてきたる教をおしへ学はしくをと
きまてしむとのことゝ業成
家名をかゝやかし給ふ事へこ誌
俗拠を定め出處をたゞし
今実のおかゝりまでも大ごみ
いつ見及ぶこの大德のいさ
をしあらはめさていゝつし年

このふしの家まつりをはじめの
おりをもて金今の申をしの
まゐらせ給ふいふあらはきこ
えはまゐらす年の家業継
よろく子孫はかなくやまひの
床よかゝりておほそわすて
こゝろむ應きふもあし継え
かゝりて六の一條をつゞ勢

の王の御らめめのゝ年を
祈るし奉る社奉るひめかき
を初るこの神ようけてくしする
やまと魂ゝをもたらに奉る紙
ゝ魂ゝ清者何九のせをを
をゝゝゝゝ

そもそも素盞嗚尊

信仰の何のゝとゝ仰
ゆ心翁を支保きる
民間のめし毛用子
ゝて我廣麻を知てゝ入

ふしの録をとゝ
聞ゐ許多の序跋あ
今たゝ何をよいたせ
ばゝ便ゝ容貌平
翻ん二年七敷音声

共ゐ惣多蕉翁の七部
のやゝゐおりゝを飧
上木ゐ集註けるの
金匱とやいたん世の人
の惑ゐゝくゐ主馬

備忘の功よりすぐれ
るものとしてのるを
冠の書るものせ

葉雪庵北元

何九老人のそゝ世を
まこと生の方をもめてゝ
この毋の事ゝ
をもしし人の對して
附ゝの所業ゝ

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
解する[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

なの人自負好云のそこへ
ゆくもむやすく毎年繁昌
年をへれば京都にこゝもあり
外作くものハ作者作者

七世よりもてくやすくいい出
後なる七部集家くのみきやう
區くよりて移をる新も一樣
なるをこれもくゝ烏梅汁のる
たるあんみのねのたくさもあく

と打ちしいとりてけと一こゝ法花
ゝまるみゝを出る大阪八月院社
仏花ゝ多陸れりまゝ書かゝる
めてゝをよれく高野の国より
明ゝとゝれゝまゝその国名高ゝ

けゝすみほゝしひゝ
ゝやゝまゝてわゝしゝゝ家光
ゝゝゝ

かゝ法花長嶺

昔ゝ唐書籍の後編より清を去
ること幾許か少かるべきも向秀ら莊子
季吟ら源氏其功多古今吟さるよ秀
友何ぞ八世より左姫紫しく七部の編
新撰妄千里を得るを欲き二十
年来此一筋より魂を以て和漢の書

畫を服膺せし古徳の名を田園を
あらそふ孫子の名を門のかぶせて今や
樣々たりける世に公案をとりて
除喝棒此大鏡天下に出て光を
爭ふ所の大法を照らすを
舊門に新門の門生一度法を究せ
て名を立る能門のかぶせて言を

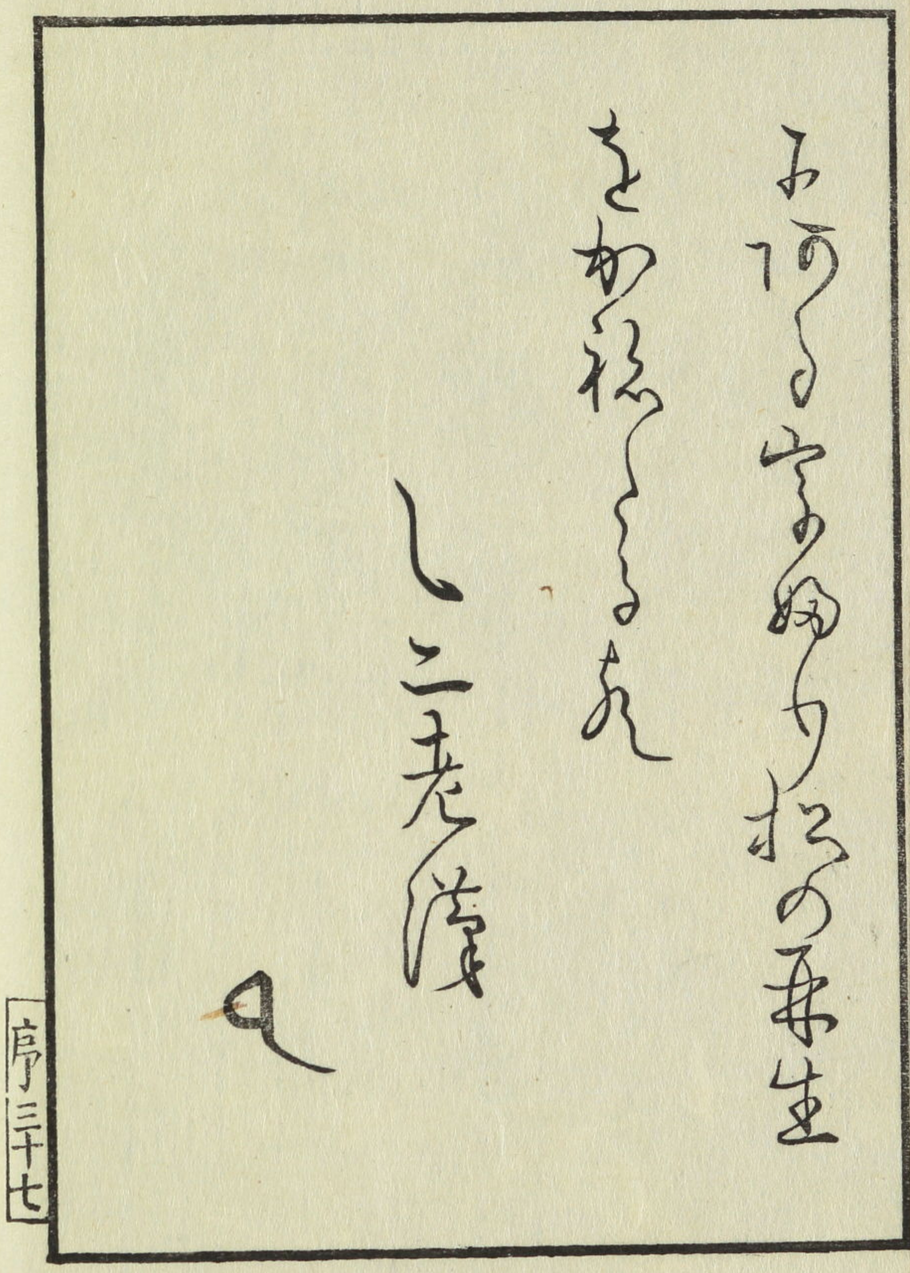
沸妙の佳境をも入ぬ面々かの元孫
の昔常を餘に畫すれ梅の先と
以て出て是婚しのめて法の和及法河
を分ふるも吟ぶ法を求めるを思
ちまへの義形めと世無をみられへる
自元百年の習此七十年明る緒
元を立ん人をも見をさ除ハ見も

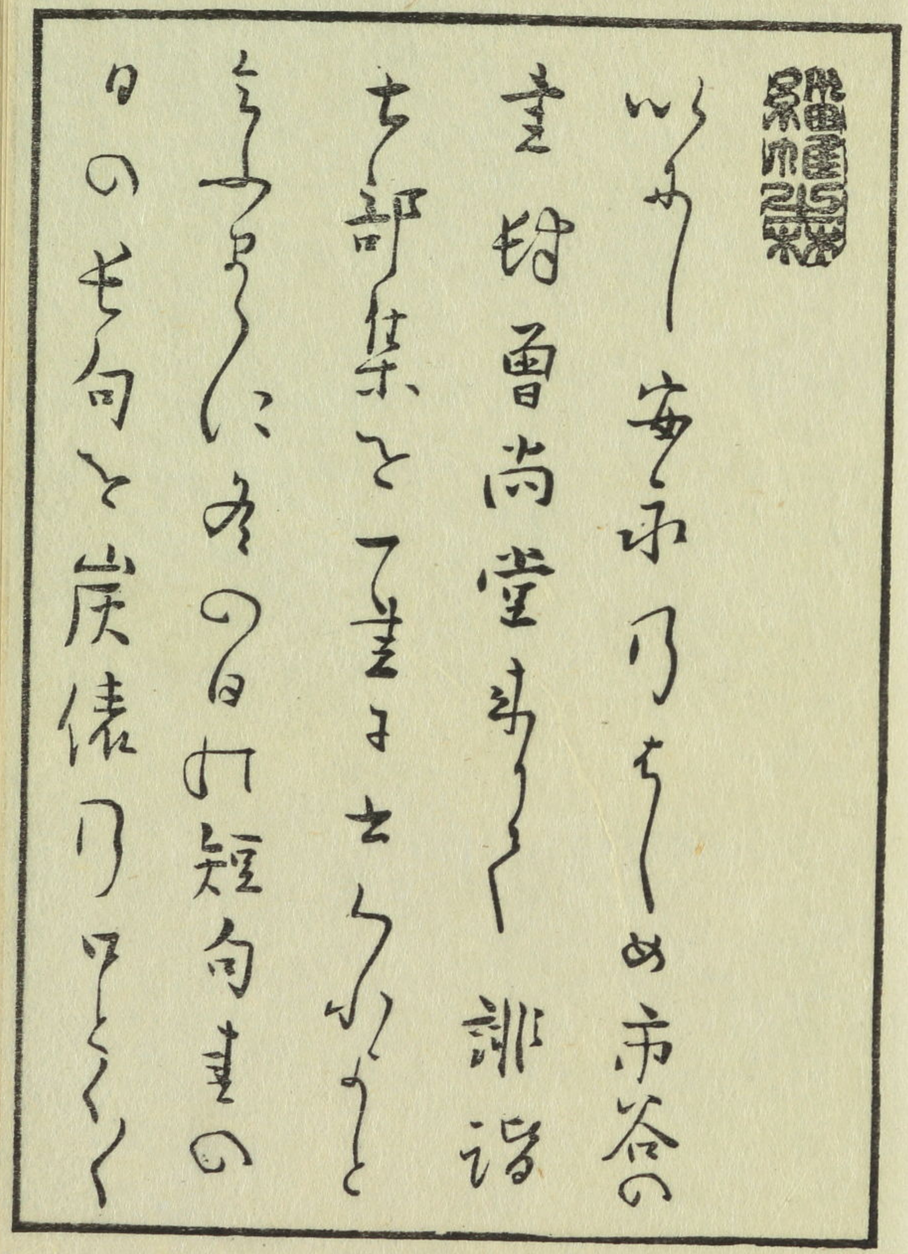
今ハ亦〻た人ハ形ハ変ぜるか、
新大業を生ずるを以て而
屏弧蓬矢四方乃志を
東海玉蕉庵
芳山

志ゝの何たるを人七部
大鏡といふを上梓する
ゝ志ゝ甘ゝ成乃ゝ甘
人ゝ和ゝて世ゝをいへゝも
玉蕉庵ゝ山ゝ古ゝ伝

の宮和俗うまの久乃影
ある八俳句の両端ふわ〻り
て〻ゝ拾てさ〻めう〻ぎく
さ〻しきよくきこゝ中形
りあまて其考乃正

一きゝ〻いきあるる貝原先生
あるら〻ぬ我生て〻ぬ事
また物きひやうふこの大業
のあ〻乃ゝ大ふく〻〻き
ゝ拾も足利文庫の俗





ふるこのつまもくく
きくあるくらぬ山くみす
のるこゑのまほからなと
いて給このき部の注釈と
つくくしたる都のあ事こ
ときとひ猪きの小著より

手うてきとほけらるを
あらのあるくく
きてみるぬ
又政二のくし雲月
七十一名
大形絵入
蜀山

俳諧は角ばりたる美やかに
たをやかなる和歌也たとへば一ぱの
雪月花や草に附たる樣と
美和歌をかなの歌たるがごと
きなるべし

世に七部集とて春はら歌へる
さゝしは連句をかくみゞかや
の作法を説くこと四十餘篇
ひろきを当今の雅士たゞ
たゞ通れい義なるのみ也

序四十

かゝるうへてはかゝる法
式格を侍ふるのみやすそよる
ものゝ一事捕ちをはかたき
和をたゞすをたゞすらに
あやまらざるものとなる歟

此至拙を素通て
こゝ程あゝよかく美世にや
美哉墨のあやを

搞検校保己一

水母散人識

正方書

凡例

一 古注と記すハ祖篇直弟の論なり其教凡十五篇

一 一書と記すハ宝暦年中より文政乃今日にあるまでの注ちくゝ教おゝよそ三十五篇

一 誰曰と記すハ其人名詳ならず文通ホゝてきこえらを伝者

一 一説と記すハ世上に流布する処を見聞の侭に出す

一同注ハ先注をあけ又世評と異考と同意なるハ世間へ出ありて誰同と記す是世間の務實を奪ハさるの赤心あり之人〳〵ハ論中と限らゝ為也

一先注といへとも多くハ〳〵ぬい悉く独破せず其余の説〳〵も右と准すその確執をとゝむる事なう独

一近年の俳諧分見るとハ外なるも独見なるとそのゝちなて主記さい序よりも知と書くゝてその偏言を

紀明す故いゝとゝいへと誰句とかゝく
あるを誰ゝ殆合とけ格あるゝ近世
の俳諧を手本とする人もおゝおゝハ
道の大きなるなるを知て事
を得すす扶の仏法なゝ見む人
偏執のくをやめ俳道のゝるか
つき遠〳〵ハ連歌の祖神迄ハ
地青異神の赤意を失ふるゝ

月院社
何九述

附言

大鏡は諸家の談論なり而中
間の知の通書のごとく巨多の説あり
是を七部に分て題目を巻に著
わすごとく高論もあるべく
けれどもやはり藏書のごとくなれども
恵みのごとくその義談を記録して
永く不朽ならしむるを思ひ
本願なり四方の君子すみやかに大鏡の
くりごとをまことひろめあらためみ給へかしと

引用書目

法華経　法苑珠林　悲華経　報恩経　十王経
盂蘭盆経　傳灯録　梵網経　文殊経　般若経
高僧傳　因果経　知度論　明心法鑑　諸衆法数
千手経　僧史略　遺教経　涅槃経　禅林類聚
史記　前後漢書　晉書　南史　宋書　周書
唐書　宋史　通鑑紀事　素書　廣雅　戦國策
六韜　易経　書経　詩経　礼記　春秋　左傳
春秋元命通　史記正義　易候　五経通義
詩経正義　曲礼　周礼全経　論語　孟子　晉子
列子　荘子　抱朴子　淮南子　五雜俎　爾雅
酉陽雜俎　五車韵瑞　白虎通　琴操　荀子
風俗通　碧鞴録　孔子家語　太平廣記　魏豹伝

典籍弁覽　太平御覽　荆楚歲時記　事物紀原
事林廣記　事文類聚　類書纂要　漢武故事
前漢外戚傳　漢武内傳　事文後集　樂書
翰墨全書　書言故事　寶典　雜五行書
漢事始　杜氏通典　陳藏器　對類大全　唐令
弁樂解　孫盛雜記　錦繡萬花谷　袞服小記
冷齋夜話　續齋諧記　羨淡筆談　風土記
焦氏筆乘　容齋隨筆　軒轅本記　春明退朝録
太一金鏡經　祖庭事苑　三秦記　四部稿選
黄帝内傳　韓文　柳文　潛確類書　古書
十節記　尋列源頭　玉燭寶典　塩鉄論　幽吟録
唐韻　温公詩話　瑯琊代酔　拾遺記　教坊記
帰田録　繫蒙要略　帝城景物略　古今原始
通曆　義楚六帖　學齋佔畢　出曜経　名義集

繫辞　通鑑齋記　寒山詩集　山海経　通典
樂府雜録　遊仙窟　品類事實　新論　論衡
太白陰経　魏略　楚辞　皇圖要記　蜀王本記
帝王世記　墨子　抵子新論　玄中記　古史考
物理論　三礼圖　大戴礼　古今注　海録碎事
毛詩　仙傳拾遺　管子　世風記　月令廣義
歳華紀暦　古樂府　漢雜事　講德論　通論
漢武策　毛詩傳義　涉世録　玄紗内篇
諸子娘環　東觀漢記　秦書　顔子家訓
笑苑類稾　通載　格物記　閑元遺事　西京雜記
晉朝雜記　南越志　続晉陽秋　輟耕録　洞冥記
退耕録　説苑　孫氏世録　異苑　世説新語補
養生論　蒙求　成語考　彖蛮海集　続世説
格物義話　陸佃埒雅　鶴林玉露　要言故事

聯珠詩格　小說　搜神記　神異經　錢神論
小学　神亀論　質亀論　器録　劉向五行傳
相鶴経　蔡邕獨断　仇池墨記　集林大斗記
大明一統志　華陽風俗記　禽経　獸経　博物志
運斗樞　天文志　韻府　麗居士造録　韻會
説文　句略　圓機活法　三才圖會　造化論
神仙傳　高士傳　隱逸傳　列仙傳　才士傳
文選　古文　朝詩外傳　本草小品方　病源論
三體詩　錦繡段　杜律　白氏文集　木子白詩集
山谷詩集　東坡詩集　朱子造録　詩経齋風
名物弁解　沈存中筆談　温故日録　四六文章
東齋随筆　江湖風月集　石林詩話　詩人玉屑
華嚴経　僧祇律　金剛経　德義経　朝野群載
舊事紀　文德實録　故事紀　日本紀　類聚国史

神皇正統記　本朝通鑑　諸社根元記　日本史
藤原系圖　和漢朗詠集　延喜式　続日本紀
本朝逸史　本朝列仙傳　職原抄　倭姫世記　人史
扶桑捜神記　日本後紀　清輔奥義抄　職員令
神社考　菅家御集　清輔雜談集　和歌色紙抄
元亨釈書　中右記　名月抄　釈氏要覽　家礼
万葉集　資道什物記　本朝月令　新撰万葉
古今集　八雲御抄　後拾遺集　続古今集　江記
後撰集　新古今集　続拾遺集　新勅撰集
新後撰集　金葉集　続後撰集　千載集　閑花集
続千載集　続後拾遺集　新後拾遺集　玉葉集
風雅集　新続古今集　拾玉集　小町家集　頼政家集
山家集　西行家集　俊頼家集　夫木集　伊勢家集
信明家集　名寄集　堀川百首　堀川後百首

擧白集　藤川百首　新明題集　六百番歌合
曽我物語　十寸鏡　埃嚢抄　古今栄雅抄
久安百首　正風体抄　悦目抄　和名抄　六帖
仙覚万葉抄　古今目記　清輔袋草紙　行取物語
源氏物語　伊勢物語　落窪物語　大和物語
栄花物語　世継物語　続世継物語　任吉物語
平家物語　今昔物語　狂雲集　十六夜日記
梁塵愚抄　耳底記　宇治拾遺　長明發心集
撰集抄　徒然草　江家次第　長明道之記
無名抄　公事根元　長明方丈記　年中行事
長明論道記　春乃曙　河海抄　長明伊勢之記
新撰髓脳　花鳥余情　拾芥抄　源平盛衰記
清少納言　井蛙抄　江源武鑑　日本昊異記
文献通考　根本律　要言故事　徽書記物語

簾中抄　文章軌範　春雨抄　遠嶋御百首
歌道的物　暁華抄　扶桑略記　本朝列女傳
羅山集　天文雜記　北條五代記　和漢合運
善隣国宝記　草山集　下学集　長明文字鏡
圖繪宝鑑　古事談　公卿補任　古今著聞集
懐風藻　続古事談　一円雅談集　大成経
大朝年鑑　和漢三才圖會　十訓抄　東西夜話
千五百番歌合　隠逸傳　続隠逸傳　民家宜忌録
太平記　旧遺考録　女郎花物語　源語秘決
桃花蕊系　江談抄　本朝醫考　日本釈名
禁秘抄　膾餘雜録　雲谷雜詠　霞醬集
行狀記　南浦文集　和歌八重垣　要華傳　海人藻芥
掌中暦　大和本草　高名録　武用弁略　兵昊俎談
篁之記　言塵抄　醒眠記　東鑑　秉燭譚　歌抗

全浙兵制　新田軍記　卷懐食鏡　隨聞記　一休咄
後太平記　名物六帖　素堂家集　竹斎物語　大鏡
大原千句　藻塩草　武備志　古刀銘鑑　和事始　畫史
筭学啓蒙　年山紀聞　砂石集　京羽二重　東海記
詩経秋風　三國語林　名物弁解　多識篇　退私録
沈存中筆談　温故日録　東秋清夢　石林詩話
江湖風月集　詩人玉屑　四六文章　貞觀式　和字正鑑鈔
畸人傳　玉海抄　玉京記　養生論　金剛経　萃叢経
北山抄　世説問答　呉行集　三餘抄　東関紀行　保元記
康富記　怪異弁洛　誓願寺　酔醒集　食物本草
旅波問答　国史實録　行厨集　神名帳　仇物語
北条盛衰記　漢語抄　西行法集
此外諸歌連俳の書目多くあれとも
まとハ略し畢

芭蕉翁俳諧に決　或云北枝伝　或云正風伝

格に入て格を出るを格に入らざるを格に出てはじめて自在を
邪道に堕す格に入格を出を味ひて心を向上れ
ば也し　詩歌文集を味ひ作を思ふ減よめらす也し
一路にあらひ作を思ふ減よめらす也し
千年不易一時流り　他れ白き彩色の
はくく我心に白き墨絵のごとくすべし形に
ゆきてたゞ彩色のきはまるを心能つまの
たゞてさひたをわを第一とす　名人を能を
よく調ふ也し　一句形よりまてをあやまる事
勿れ　上手をたゞたのきとゝろよ面白みあわ
等類伝例第一吟味すべき也し　古今撰集に
眼をさらす也し　我つれ発流を学ぶ人を

鶴は歩みの百韵をの旬夫れ日暖野ひばこ
猿簑炭俵等を撰び賞をすゝ〳〵紙白を世代く
をすゝ〳〵　初心の時を始むゝ夫より
姿婆を見のら大山を越て向ふれ林鹿一下るる
石を楽すゝ〳〵六天を越むと思へく将ふ七天を登
むゝ〳〵さまを心るき時を邪路ふ入安くさく後
低き時を古人の胸中をさるるあるいは
それいを中よりふれるのとの登ものまるを俗談
平和とのみれをえるる故より俗談平和を爲
めをむこのるるりはくるきるをるるをいふの
をいふと見えるるをあきすゝきるこ俳諧ハ
万紫の意るまを貴とるく俗とるく味りく
登きをるる唐明すゝて中華れ豪傑ふる
和るる年峰心のいなしきを辱ふ

てふをを書る西るる夫我邦そてふをれ西
るまを先哲れ作を味をひ一西を兼ふるる
きく乳これ　旬の姿をまを柳の小西ふるまを
をるるぬくるすて形〳〵微風ふなやるはふなの
しるを附心を落月夜ふむぬれ自〳〵敷ふく
あるるを情を心裏の花をまるはるれ芋ぬ
れ月をを紀す西し

一書ふいふ西るるを正風七部と称しける
りれるるるこの要れ日続猿簑をれるき
雪まるるけ鶴のあ西ふをくを〳〵文を涼川
卯辰れ西集るをるれ様ふ〳〵ぬき家〳〵のの
すきるるてをの続るきふるあを〳〵
愚を花れるらくすゝてを耳りて学ふ人

れみをけく心りてきくくんれいとしたるく
るまうう〳〵ふ本授まうとそれたうとうひふ
まとひをうさぬ冨きにれみ抱くをうふるう
ゆくもれまうあわるの伝書をせまも
知まるくんのままらるうとえぬまえぼし
めにされをあるそうぬされたるまてのひう
おすひをさうしをまをるひねとれこう
まくまいふ

一 冬扎日　貞享元甲子年出板
一 初懐紙　貞享三丙寅年
一 春の日　仝捻出板
一 曠野　元禄二巳巳年出板
一 麓風　元禄三庚午年出板

一 猿蓑　元禄四辛未年出板
一 炭俵　元禄七甲戌年出板

是冬十月十二日於難波旅館辞迁化時年五十有一ト云云

続きうみのそ祖翁滅後の書るうり芭蕉伊賀
の連衆翁扎本哉まよ書れなきそ残をるり
とをきうまりにうり蕉桜こ生前より兵畑集
出ふ〳〵敬まて撰集を果さん事此ほうり
まけうる上よをうり翁きを撰ひてかるを僅ふ
二百をうり書をを〳〵て開板ををほやと宥まよ
その手大坂りて迁化あわしまより空しく
はまをまうしを増補して開板をり侍るの
ふうるふ哉のり祖翁滅後の句くをををみえ
て亀鶴とををまうう世くれまくをる不
をうるあるまりしをこのいほるみて改補の不詮

を述るれみ
続きるみの巻頭書ふ別巻ふ任して意蒙の
便覧ふ充り

題号釋論

愚考元歌号を立るふ五意の義あり一曰名
二曰體三曰京四曰用五曰教るり此義ふくらき
ときを解するふ難く立るふ選多し
一 多の日五歌仙并追加の表合ふいるまて皆
を白れ巻改るり此體ふ俗りあまき則
體ふよりて号するるり用るり 體を他礼之切作ル
亦曰身るり
一 初懐紙を多ふ号るり巻用るり用る余共
之切ツカフるり モチ 説文曰用を可施行ト云ク

一 巻れ日 巻れ日ふ因し
一 曠野を名るり多を弥成ら切号凡るり
又曰才ホイ るわ此集や花を月雪神
歌意玄常名所古跡人名行るれよひ
宗祖宗貞室西武宗因玄旨般齋
その外他流の諸家ふいるまて方ことふ
極りるき廣京ふ比して名目する歌号
るり曠を廣るり東西を廣と云南北
を長と云曠世を廣きを世といふ義と
全侍支木集ふ倣ふての撰集なまて
日本の地形を多して号するれ歌号るり
支木集を本名枝葉集るるを悔り
て篇と冠を取て支木とるる号をしと
その支木集ふなるふての篇集るるまハ

技楽は地の形をもて称するなり肥前長崎
大坂長町越後長岡信濃長沼郡白南北に長
き地なり廣島廣瀬廣田越前廣といふ
字は附ける地を皆東西に廣しと云て
技楽則東西に廣し故に曠野とも題
せり
附て云負郭とわけて別れ称る彼夫木
集中上古よりその時代よりいまに万葉
古今以下は撰集ふれるを悉くあつめて爰想
ふ按るに歌号なり曠野も又代々の
集ふるまを或を正風ひ
ろひなつめて歌仙を去の集は余なれ
を負郭とそ号ものなり
一 歌を右ふれるまして名なりきは集を

大津は孫碩この篇集なるまは彼江湖の飄
を本ゆして歌するは号なり狂集の序
文は注釈ふ爲しなまは略す
一 猿蓑を宗なり宗を祖冬之切徳なり又曰なむ之
流派の出る処を宗と云丈猿蓑を蕉翁一派の
俳諧を尊ぶ故ふ巻頭の一句をもて歌号ます
何流何派何宗とふ事ふ猿蓑の文章
ふ漢文ふ委し
一 炭俵を教なり教を居孝之切令なり
誨なり サワクル なり ニチヒクなり 祖翁の猶
言を守居てその俗号する故ふ論なく
教なり狂爲しくなる集は序文ふ論す
面し来者は面し此五義を盤とすむは
おそらくそなのやまたちなるむふ万は書籍を

五義の序まで出来